

ミルトンの『教育論』訳注

私 市 元 宏

ま え が き

本文と注は、主として Yale University Press : *Complete Prose Works of John Milton* ; vol. II, 1643—1648, 1959によったが、本文には、そのほか、O.M. Ainsworth : *Milton on Education* ; AMS Press, 1970 をも参照にした。

この『教育論』の日本語訳としては、すでに西山哲三郎氏のものと信森広光氏のもの、その他にも部分訳があるが、これら先達のものも参考にして、適確な訳語は、これを用いるようにした。本文と注の固有名詞と著書名の訳は、主として平凡社の『世界大百科事典』を参考にしたが、その他の訳にもよったり、筆者が直接訳したものもある。すでに定訳となっている題名がありながら、筆者の遺漏で違った訳になっている場合はぜひ御教示いただきたい。

なお、訳注にそえて解題のようなものも付すべきであろうが、これは「ミルトンの『教育論』についての一考察」（『英文学試論』第5号）と題した拙論があるのでこれにゆずることにしたい。委細にかかわらずお気づきの点があれば御教示下さるよう先輩および同学の諸氏の御指導を仰ぎたい。

教 育 論

—サムエル・ハートリブ師へ—

ハートリブ先生¹⁾

何事か後世に残り模範となるにふさわしいことを言ったり行なったりする

1) Samuel Hartlib(1596[1600]—1662) プロシャ生まれ。父はポーランド人の商人。母

には、ただ神と人類への愛のほかには、いかなる意図やもくろみにも動かされてはならないと久しくわたしは確信している。しかしながら、教育の改革について今わたしが書くのは、それが考えうるもっとも偉大で気高い構想であって、それなしにはこの国民が腐敗して滅びるものではあっても、あなたの熱心なすすめと真剣な御要請なしでは、今の時にとてもその気にはなれなかったことである。というのも、目下わたしの心は、ある異なる方で大義を追究するのに半ば傾いていて、これの知識と実践も、真理を解き放ってより円満に立派な生き方をするのに必ず大きな助けとなるに違いないからであ

は英国人。1625年—26年頃ケンブリッジに学ぶ。その後、故郷のエルビングで牧師の職にあったダーリー (John Dury) のすすめで1628年までには再び英国にもどっている。1630年、ロンドンの西南チチェスターに教育改革を目差す新しい学校を設立したが財政上の理由で失敗している。彼は、当時大陸で教育改革者として名声のあったコメニウス (John Amos Comenius) の熱心な信奉者で、1641年の9月から翌42年の6月までの間、コメニウスを英国に招いて教育改革運動を行ない、文芸から自然科学に及ぶ広範囲な知識を授けることを目的とする自由な教育を目差す大学を設立しようとしたが、議会の十分な支援が得られないままにアイルランド紛争が生じたためもあって中止せざるをえなかった。これが、後に英国学士院設立の一因となったとも見られている。だが、1641年の秋に始まるダーリー、コメニウス、ハートリブの提携によるこの革新運動は、英国の知識人に深い影響を及ぼした。ハートリブの著書には『名高いマカリア国見聞録』(1641) やコメニウスのものを英訳した『学制改革』(1642) などがある。

彼がミルトンと知り合ったのは1643年頃で、ミルトンは、ダーリーやコメニウスと直接会ってはいないと思われる。この出会いによって、教育改革について2人の間で数回にわたる意見のやりとりがあって、その結果、ハートリブは、ミルトンにも教育論を書くようすすめたものと思われる。もっともハートリブは、コメニウスの教育法の熱心な支持者で、ミルトンとは多くの点で意見の一致を見ながらも、ミルトンの『教育論』が、彼の意に十分そぐわなかったという見方もできる。ハートリブは、外にも幾人かに同じような要請をしていて、その中、ミルトンのともう1人のとを除いては、いずれにも賛意を表したり自分でそれらのパンフレットを出版したりしているからである。1644年6月5日に出たこのパンフレットが、両者のどちらの手によって出されたかは不明である。

- 2) ミルトンは『英国民のための第2弁護論』で、人間の自由において教育の果す役割を位置づけている。(「ミルトンの『教育論』についての一考察」参照)

³⁾る。又、たとえ個人的な友情のきずなにひかれても、このように中断したり先に考えた予定を変更したりすべきではなかったわけで、それはこれらの目的と行為とをわたしが見て、遠い国から良き導きによってこの国へつかわされ、この島国に大きな益をもたらす切っ掛けとなり刺激となった方であるとの尊敬を抱くようになったからにはほかならない。聞くところによると、あなたは、きわめてすぐれた賢明な人たちやわたしたちの間で最高の権威者とされている幾人かの人たちと同じ名声を受けておられる。あなたが、外国の学識ある方々と文通を保ち、又、かく導き給う動かし難い神のみ心にせよ、あるいは独自の天性のしからしめるところにせよ（これも神のみわざではあるが）、当地においても海外でも、この問題になみなみならぬ労苦と努力とを払ってこられたのは言うまでもない。このような名声と尊敬とを受けておられるような方が、よもや御自分の洞察力にそむいて、わたしには無理で荷のかちすぎる課題を負わせるとは考えられず、これはあなたの言われる通り、ふとしたことで交わすにいたったわたしたちの語らいを通して得心がいて、事が急を要する上に神の定められたことを行なう又とない機会でもあって、⁵⁾この点についての御要請の件をわたしがこれ以上延ばすべきでなく、良心的にも許されないとの思いにせまられて半ばやむをえず確信されてのことであろうと考える。それゆえ、神からにせよ人からにせよ、あなたがわたしに課すつとめを拒むことをせず、長らくわたしに示されていたのに語らずにいたより良い教育についての理念を想（そう）の湧くまま御要請に応じて直ちに書きあらわそうと思う。これは、これまで実施されてきたものよりは

3) ミルトンは、1643年8月に『離婚の教理と規律』を出し、翌年2月にはその増補版を、さらに7月には『マーティン・ブーサーの離婚思想』を出している。従ってこの『教育論』は、これら一連の離婚論争の最中に書かれた。

4) ハートリブを差すと思われる。

5) 1641年6月の大委員会の勧告に基づいて、議会は、司祭長と牧師団から没収した土地を「学問と敬けんの高揚」のために用いるべきことを決議している。

6) プラトンの「イデア」の意味。この『教育論』には、全体を通じてプラトニズムの影響の濃いことが指摘されている。

るかに広い範囲と内容におよび、しかもはるかに短期間でずっと確実な成果をあげうるものである。わたしは、つとめて短くしようと思う。というのは、わたしが述べなければならない事は、この国では確かに緊急を要することであって、語るよりも実施されるべきだからである。従って、古代の著名な著作家たちからこの点について得た益を語るのは控えよう。又、読み切れないほど多い現代の『入門』や『教授学』⁷⁾のたぐいが企図している事を調べるのも気が進まない。ただ、宗教と社会の知識の研究に捧げつくした学究とめい想の長い年月が咲かせた、言わばその精華ともいべきわたしのいくつかの見解と、語らいの中であなたの意にかなった事とを受け入れて下さればと思い、ここにそれらを述べておゆだねする次第である。

さて、学問の目的は、神を再び正しく知るをえて、わたしたちの最初の親が犯した墮罪を回復することであって⁸⁾、その知識によって、神を愛し神になり、できうるかぎり神に近いものとなるためにわたしたちの魂に真の美德⁹⁾

7) コメニウスの著書『語学入門』と『大教授学』とに言及したもの。『語学入門』は、1631年に出て以来、各国語に訳され、英国でも版を重ねていたことから、ミルトンも当然読んでいたものと思われる。『大教授学』が出版されたのは1657年であるが、ハートリブは、コメニウスからこれの要綱を早くから入手していて、ロンドンでこの要綱のラテン語版(1628)と英訳(1645)とを出した。ミルトンは、おそらく、ハートリブを通じてこれを知ったのであろう。

ここでのミルトンの言及は、コメニウスの教育法を暗に軽視しているようにも受けとれるが、ハートリブが熱心なコメニウス主義者であったことを考え合わせるとむしろミルトンは、自分の教育法が「古代の著名な著作家たち」に基づいたものであって、同時代のさまざまな試みには左右されない独自のものであることを言いたいのであろう。

8) 教育の最高目標を宗教に置くことは、ルネサンス期の英国の教育界の通念であるが、ミルトンの場合、ギリシア、ローマの古典の研究が、この目的にそうことを明言しているのが注目される。

9) 『新約聖書』・ヨハネ第一の手紙3章2節「愛する者たちよ、わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現われる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。」

又、『教会政治の根拠』(1642)でミルトンは次のようにのべている。

「神と人間との間に立てうるもっとも厳格で緊密な契約である福音によって、わた

を有せしめて、それが、信仰という天からの恵みと結合して最高の完全を形成することにある。¹⁰⁾しかしながら、わたしたちの理解力は、この肉体にあっては感覚にのみ基づかざるをえず、目に見える、より劣った被造物を順序正しく研究すること¹¹⁾で得られるほど明らかに、神と見えない事柄を知る知識にいたりえないのだから、あらゆる事を賢明に教えるにも必然的にこれと同じ方法に従うべきである。しかも、いかなる国民も学問のあらゆる分野において充分な経験と伝統とを与えてくれるわけではなく、それゆえに、英知の追求にどんな時もきわめて熱心だった人々の言語をまず第一に教わるのである。¹²⁾それだから、言語は、知って役立つ事物をわたしたちに伝えてくれる道具にすぎない。だから、たとえバベルでばらばらにされた世界のすべての言語に通じていると自負するほどの言語通がいるとしても、単語や字引きと同じく、それらの言葉にふくまれている実質を学びとっていないのなら、母国語の知識だけを充分に備えているどんな自作農や商店主ほどにも学識ある人とは評価されえないであろう。こういう所から、学問を一般的に味気無く成果に乏しいものとしてきたいろいろな誤りが生じる。まず、別の方法でやれば、1年間で容易に楽しく学べるくらいの貧弱なラテン語とギリシア語をや

私たちは今や神の子となる資格を得たのだから、神のことを思い、神のようになり、神と一つにされ、み旨のままにこのことを表わし、神と交わりをもつことほどわたしたちにふさわしいことはない…」

なお、この所をプラトンと関連づける見方もある。(『テアイテトス』176・B—C参照)

- 10) 『新約聖書』ペテロ第2の手紙1章5節—7節「それだから、あなたがたは、力の限りをつくして、あなたがたの信仰に徳を加え、徳に知識を、知識に節制を、節制に忍耐を、忍耐に信心を、信心に兄弟愛を、兄弟愛に愛を加えなさい。」
- 11) このように「より低い事物」を知るための「低い智慧」から、宗教的、倫理的な知識にいたるための「真に唯一の高く価値ある英知」(『教会政治の根拠』)へと到達しようとする仕方は、たとえば、ダーリーやコメニウスなどにも共通する点がある。
- 12) ルネサンス期の英国のナショナリズムはこの『教育論』にも強く出ているが、ミルトンは、全体を通じて英国人の著作を一つも挙げていない。
- 13) エラスムスやベーコンにも同様の考え方が見られる。「学問の最初の乱れは、人間が、言葉を学んで実質を学ばない時である。」(ベーコン『学問の進歩』)

っとこさ覚えるのに7, 8年もかけるのは愚かなことである。¹⁴⁾語学で上達の著しい妨げとなっているのは、一つには、学校と大学の両方で、あまりにしばしばむだな休日を与えられたり、又一つには、子供たちの空っぽの頭で無理に作文や作詞や演説文をやらせるという本末転倒な要求を押しつけたりして時間がとられるためである。¹⁵⁾これらは、もっと成熟した判断力を要するわざであって、長い間の読書と観察によって得られた当をえた命題やさまざまな¹⁶⁾の発案力を十分に備えた頭の行なう仕上げ仕事なのである。こういうものを、かわいそうな青二才から、鼻から血を絞り出すように、あるいは未熟な実をもぎ取るようにすべきではない。その上、粗野な英語流で、せっかくのラテン語やギリシア語の語法をすっかり台なしにして読むと虫ずが走るものにしてしまう悪い習慣がついてしまう。これは、洗練された文体の作家に順序正しくじっくりと接して理解し、自分のものとしなければ避けられないのに、彼らはこれをあまりよろこばない。これに返し、ある定められた変化表で、言語のある程度の初歩的な基本を暗記した後に、何かすぐれた短い¹⁷⁾本でこれらを徹底的に練習するならば、それから直ちにすぐれた事物と諸学問と¹⁸⁾にふくまれる本質を正しい順序で学ぶべく進むことができ、こうして、その言語全体を早く思いのままにできるのである。わたしは、これこそもっとも合理的で有益な言語学習方法であると考え、これによって、神のみ前に出た

14) このような批判は、当時の識者の間に強かったようで、ミルトンが学んだ聖パウロ学校でも、時の校長であるコレット (John Colet) が、カリキュラムの改革を行っている。このためミルトンが入学した時は、ラテン語文法を4年間、ギリシア語文法を3年間、ヘブル語文法を最後の1年間に学んだと思われる。

15) このように、古典語の作文や演説を広い読書と研究の後にまわすというミルトンの方法は、ルネサンス期の文法学校の慣習と基本的に異なる。

16) 修辞法でいう“*inventio*”とは、書いたり語ったりする時に、自分の論旨にふさわしい題材を探したり発見したりすることをいう。

17) 中世の3学(文法、論理学、修辞学)を教えるにあたり、主として文法の規則を学ばせるために文学作品を用いるのは、17世紀初頭の英国の学校の方法であった。ミルトンは、エラスムスやコレットと同じく、文法を学んだら直ちに「すぐれた著作家」のものを読ませようとする。

18) いわゆる“*liberal arts*”に限定せず、より広く学問一般を差すととるべきか。

時に、わたしたちが青年時代を語学に費やしたことの申し開きが立つと最善に期待できるのである。学問を教える一般の方法について言えば、大学は、野蛮時代のスコラ的な愚行からいまだ充分に立ち直ってはおらず、昔ながらの誤りを犯していると考える。それは、学問のもっともやさしい分野から、すなわち感覚でもっとも明らかに認めうるものから始めないで、着いたばかりでその資格もない若い新参者の前に、いきなり論理学や形而上学などの最高に知的な抽象論を持ち出すことである。¹⁹⁾その結果、構文も覚つかないままわずかばかりの単語を学ぼうと、文法の平州浅瀬にやみくもにしがみついていたのが、そこから離れたばかりでいきなり別の気候帯へと移されて、底荷のない船同様のあぶなっかしい頭で、論争という底知れぬ波立つ沖で翻ろうされもまれて、よろこびを与えてくれる立派な知識を期待していたのに空疎な観念やたわごとにあざけられ欺かれどうして、大ていの者は学問に対する嫌悪と軽蔑に落ち入ってしまうのである。とうとう貧しさや若気のいたりから、まだその時でもないのに脇道へと誘われ、友人に引きずられるまま野心と欲得だけの神学か、あるいは熱心ばかりで無智な神学へ走ったり、あるものたちは法律業へとひかれて、教わったこともないものだから、正義と公正について思慮深く敬けんに思いをめぐらし、その上にみずからの目標をすえることもせず、開廷期間中の実入りの良い訴訟事件やたんまり入手料などへの思わくに期待と楽しみを置けば、他のものたちは国事におもむきながら、その魂が美德にも真の気高い教育にも教化されていないものだから、宮廷でのかけひきや独善的な言いまわしこそ最高の智恵だと思って、うわべだけだとは思われるが、奴隷的な義務感を不毛な心にふきこまれてしまうのである。最後に、もっとみやびやかで浮かれやすい連中は、ほかにすることも知らないものだから、退いてぜいたくと安楽にふけり、宴楽と浮かれさわぎ

19) 「大学の学生たちは、あまりに早くまだ未熟なのに、論理学や修辞学に出会う。これらは、子供や初心者よりも学位を得たものによりふさわしい学問である。」（ベーコン『学問の進歩』）

20) ミルトンは、当時の聖職者たちの金銭欲と知的教養の不足とを特に強く批判している。（『リンダス』112行—131行参照）

に日を送る。もっとも、いずれにせよもっと真面目にやらないのなら、これが一番かしこくて無難ないき方というものだろう。ともかく、これらが、ただの言葉が習わない方がましなものばかりを教えてくださいの諸学校諸大学で、あたら青春を空費しているわれわれの誤りでありその結果なのである。

すべきでない事をこれ以上並べて引き止めることはせず、直ちに山腹へ御案内して徳を立てる気高い教育にいたる正しい道を指し示すことにしよう。始めの登りこそ骨が折れるが、そのほかは実になだらかで緑したたり、うるわしい眺めに満ちて、あたりは妙(たえ)なる調べにつつまれ、オルフェウスの立琴²¹⁾もこれほど心ゆかしくはひびかなかったほどである。鈍くてなまくな若者たち、これら切株同然の連中でも、こういう幸いな教育を受けたいとの限りない願望に駆(か)り立てられるためには、疑いもなくなすべきことがあるはずで、わが国えり抜きの有望な頭脳を、引っぱったり突いたりして、のげしやいばらのろ馬の餌なみのスコラの学問へ連れて来て、いともやわらかで感化しやすい年頃の食べ物と楽しい仕事はこれだけだと一様に押しつけるばかりではだめであろう。それゆえに、わたしが完全で高貴な教育と呼ぶものは、人をして、平時でも戦時でも、公私いずれの務めをもすべて、正しく巧みに雅量²²⁾をもって行なうよう訓育することである。このすべてを、

21) ギリシア神話に登場する楽聖。アポロンとカリオペとの間の子。アポロンから学んだ立琴は、鳥獣木石をも動かす力があつたという。彼は、音楽と同時に詩や学問の象徴でもある。

22) この一文は、ミルトンの教育に対する定義と考えられる。「高貴な」とは、生まれや家柄を差す。ミルトンの教育の目標は、「わが国の家柄の良い紳士的な若者」を「国の支柱」となるべき指導者に育てることである。

23) 市民性と指導性を養うことをめざすこの教育観は、プラトンのそれを始め、キケロやクインティリアヌスの考え方に基づいているが、英国では、このように国家に奉仕する公的な教育を求める声が高くなってきていた。

24) 原語“magnanimously” アリストテレス『ニコマコス倫理学』に用いられている“megalopshuchia”から由来する語である。(『ニコマコス倫理学』第4巻3章参照)偉大にして自分の真価を正しく知り、又正しく評価のできる人以外の賞賛にとられず、運命の偶然に動じない性格をいう。

12才から21才までの²⁵⁾、現在まったく無意味に文法やき弁術にあてられているよりも少ない時間でいかにしてなしうのかは以下の順序による。

まず、学院にふさわしいゆったりとした建物とこれを囲む敷地とを見つけることである。150名を収容できるくらいの大きさがよく、その中、付き添いが20名ばかりとなる。全体を監督する者が1名いて、彼は、これにふさわしい資格の者で、すべてのことを行なったり、あるいは賢明な指示と監督によって行なわせる能力があると思われる者でなければならない。ここが学校と大学とを同時にかねるべきで、ほかの教育施設へ移る必要はない。法律学や医学のような特殊な学部で、開業を志す場合は別であるが。だが、リリーのテキストから始めて、いわゆる修士と²⁷⁾呼ばれるまでを修了する期間を占める一般学科についてはここで完成すべきである。この型にならって、国中のあらゆる都市に必要とされるほどの数の建物をこのために転用することができ、これが、いたる所で学術とよき市民性の振興を大いにうながすのである³⁰⁾。この集団は、歩兵一箇中隊か、同じことだが、騎兵二箇中隊に²⁹⁾応ずるよう³¹⁾ほぼそれくらいの数で募集し、その日課を三つに分けて、整然としている

25) ミルトンは、従来の文法学校7年、学士課程4年、修士課程3年、計14年の制度を9年に縮少しようとする。卒業年齢は従来通り21才で、通例児童が学校へ入るのが7才であったから、ミルトンのやり方によれば初等課程が5年分余ることになる。この間の内容には触れていない。(注135) 参照

26) 原語 “Academy”。プラトンの学院「アカデメイア」に由来する。

27) 神学が抜けているのは時の神学に対する反感からか。

28) リリー (William Lily) が、聖パウロ学校で使用するため、コレットとエラスムスとの共編で編さんしたラテン語の教科書。初版は1513年。ヘンリー八世の時に国定教科書とされ、ミルトンの時にも広く用いられていた。ミルトン自身が学校で学んだのは1574年版。

29) 原語 “Master of Art”。

30) これらの学院は、必ずしもの国の財政によってまかなわれることを意味しないが、ミルトンが、国家的な規模での教育制度を考えていたことは明らかで、当時としては新しい着想である。

31) 16、7世紀の文法学校で、全寮制の所では、通例、学業の時間は、午前6時—11時と午後1時—5時であった。

べきである。すなわち、学習と体育と食事とである。

学習に関しては、まず、現行のものでもより良いものでもかまわないが、何か良い文法書で、基本となる必要な規則から始めるべきである。これと平行して、話し方を、できるだけイタリア語に近く歯切れよくはっきりと発音するよう習慣づける。特に母音に注意すること。わたしたち英国人は、ずいぶん北方にいたので、寒気では口をあけないため、南方の言語を優美に発音できるほど大きく口を開かない。そのため、他のすべての国民からひどく閉じられたこもった話し方をするとと言われる。英語の口の形でラテン語を間違³²⁾って発音するのは、法律用のフランス語と同様に聞きづらいものである。次に、文法のもっとも有用な事項に熟達させ、合わせて彼らを訓育して早くから美德と真の鍛練とを愛するようしむけて、おだてにのせられたりつまらぬ動機にとりつかれて道を踏みはずさないために、何かやさしくて楽しい教育に関する本を読んでやるとよい。ギリシア人のものに多くあり、ケーベスやプルタルコス³⁵⁾のもの、その他のソクラテス³⁶⁾の対話がある。だが、ラテン語では、古典的権威のあるものは目につかず、ただ、クィンティリアヌス³⁷⁾のものの始めの2、3巻と、そのほかにいくつかの抄文がある。だが、ここでは、主と

32) ミルトンが後年編さんしたラテン語文法の教科書 *Accedence Commenc't Grammar* (1669) では、例外的な変化をできるだけはぶいて、基本的な規則のみをあげている。

33) この頃でも、まだ、法的な文書には、方言化したノルマンフランス語が用いられていた。

34) Cebes (前5世紀頃) ソクラテスの門人でその友人。『ピナックス』は、誤って彼のものとされているが、アレゴリーを用いた道徳的な読みものである。ミルトンはこれのラテン訳を用いることを考えているのであろう。

35) Plutarchos (45頃—?) プラトン学派の哲人で『英雄伝』の著者。彼の『子供の教育について』のラテン訳を、ミルトンは、甥たちの教育に用いている。

36) 1572年にパリで出版されていたプルタルコスのラテン訳『モラリア』の中でのプラトンの『ポリティコス』と『法律編』から抜粋した対話の部分之差すか。

37) Marcus Fabius Quintilianus (35頃—95頃) ローマ帝政初期の文学者、文芸批評家。後にウェスパシアヌス帝によって国家支給の修辞学教授に任ぜられる。現存する著作には『弁辞教程』がある。1575年にフランスのリヨンで出版されたものでは、最初の2巻が、教育一般と修辞法、それに教授法となっている。

して巧みな基礎づくりとして、折あるごとに訓戒や解釈を織りこんで進んで服従するよう彼らを導き入れてやり、学問への熱意と美德への尊敬の念に燃え、神に愛され万世に名を残すような勇気ある人々、立派な愛国者として生きようとの高い希望でふい立たせることである。それは、彼らが、あらゆる子供っぽいしつけの足りない性癖をさげすみ軽蔑して、男らしい自由な紳士となる訓練をよろこぶようになるためであり、彼らの心をとらえるに足る技量と相当の弁舌を備えた人が、おだやかながらも熱意のこもった説得と、同時に、必要とあれば恐れをほのめかしつつも主としてみずからの模範によってするならば、わずかの期間で彼らを信じ難いほどの勤勉と勇気とに導くことができ、若い胸中に気高い立派な熱意を注いで、名高くてぐいまれな人物を多く育てることが必ずできるのである。同時に、1日の別の時間に、算術の法則と、そのすぐ後で、昔の人のやったように遊びながらも幾何の基本を教えるのがよい。³⁸⁾夕食後から就寝までは、宗教のわかりやすい初歩と聖書物語とを考えさせる時間にあてるのが最善である。次の段階で、農業に関する著作家、カトー、ワルロー、コルメラたち⁴⁰⁾に向かう。問題がもっともわかりやすいからである。言葉が難しければそれだけ良い。この年頃で理解で

38) 生前のミルトンを知る人たちの証言によれば、彼は大そう親しみ深い半面厳しく、特に生活の規律には厳格であったと言う。ミルトンは、ここでは、当時文法学校で行なわれていたように、文法を終えてからラテン語の読本を読む代りに、「やさしくて楽しい教育に関する本」を読み、これに「訓戒や解釈」を加え、さらに「説得」や「模範」をもって臨むべきことを提案する。

39) このように初期のカリキュラムで数字を重視するのは、当時としては進んだ方法である。遊びを通じて幾何を学ぶのは、プラトンによるのであろう。クインティリアヌスも教育に遊戯を取り入れることを提案している。

40) ミルトンは、まず「目に見える、より劣った被造物」から始めて、「神と見えない事柄」を知る知識にまで達しようとする。（「ミルトンの『教育論』についての一考察」参照）

41) Marcus Porcius Cato（前234—149）ローマの政治家で軍人。彼の『農業論』は、ラテン語で書かれた最古のもの。

Marcus Terentius Varro（前116—27）ローマの作家。『農業論』3巻がある。

Lucius Junius Moderatus Columella 1世紀のローマの作家。『農業論』12巻が

きないほどの難しさではない。ここで機会をとらえて、将来国の耕作状態を改善し、やせ地を回復し、土壌の良い未耕地を改良するよう彼らの心を動かしてその能力を与えてやることである。これは、ヘラクレス的な賞賛に値⁴²⁾する。これらの著作が半分もすまないうちに、それも精を出してやればそれほどかからないと思うが、どのような普通の散文でもこなせるようにきつとなるはずである。そこで今度は、何か現代の著作者のもので、地勢図と天体図、それにいろいろな地図の使用法を学んでよい時期となる。地図は、始めに古い地名のを、後には新しいのを⁴³⁾用いる。あるいは、そこで、自然科学の何か簡便な手引きを読むのも可能であろう。同時にギリシア語に入⁴⁴⁾ってよく、先にラテン語で述べたのと同じやり方に従う。これによって文法上の困難を間もなく克服でき⁴⁵⁾れば、アリストテレスやテオフラストスの生物学の全体系が開かれて参照できると言って良いかと思う。同様に⁴⁶⁾して、ウィトルウィウス⁴⁷⁾、セネカの『自然問答』⁴⁸⁾、メラ⁴⁹⁾、セルスス⁵⁰⁾、プリニウスあるいはソリ

ある。

これらの農業論は、ミルトンの時代にも標準的なものと見なされていたようで、例えば、カトー、ワルロー、コルメラ、パラディウスのを合わせたものが、1535年にバーゼルで、カトーとワルローのとを合わせたものが1543年にパリで出版されている。ミルトンは、甥たちの教育には、カトー、ワルロー、コルメラの『農業論』を早くから読ませている。

- 42) ギリシア神話の英雄ヘラクレスが、30年間掃除しなかったオージ阿斯王の牛舎を、アルフェウス河の水を引いて1日で掃除したという話から、彼が、イタリアの土壌を肥沃にしたとの伝説が生まれた。
- 43) ミルトンは、甥の教育に13世紀に出たボスコ (Sacro Bosco) の *Sphaera* を用いている。1574年にベニスで出版されたのは、168頁で天体図が頁についていて回転できるようにになっている。
- 44) Aristoteles (前384—322) ギリシアの哲学者でプラトンの門人。ラテン訳では、*Historia Animalium*, *De Partibus Animalium*, *De Generatione Animalium*, などがでていたが、ミルトンがどれを差しているかは不明。
- 45) Theophrastos (前372 [69] — 288 [5]) プラトンおよびアリストテレスの門人。『植物誌』9巻、『植物原因論』6巻がある。ラテン語とギリシア語の対訳が、1613年にライデンで出版されている。
- 46) Marcus Vitruvius Pollio (前1世紀後半) ローマの建築と工学の大家。『建築論』

⁵¹⁾ ススのものに近づくことができる。こうして、算術、幾何学、天文学、地理学等の基本と、合わせて自然科学の一般的大要とをすませた後で、さらに別かれて、数学では三角法のような応用科学へ、さらにそこから、築城学、建築学、工兵学や航海術へと別かれることができる。又、自然科学では、気象学、鉱物学、動植物学から解剖学にいたるまで漸次進むことができる。さて、次の順序として、誰か退屈しない著者のもので、医学の入門をも読ませるとよい。これは、体質、体液、季節⁵³⁾と、それに消化不良の処置方とを知るため、この処置をたくみに時宜にかなって行なうことができる者は、すぐれた医者であって、自分自身と友人のためばかりでなく、この簡便で安あが

10巻がある。1552年のリヨン版には詳しい注解と図解とがついている。ミルトンはウィトルウィウスのものを甥たちに教えている。

- 47) Lucius Annacus Seneca (前5〔4〕—後65) ローマの哲学者。彼の『自然問答』7巻は、ミルトンの頃にも権威あるものと見なされ、全集でも個別にも出版されていた。
- 48) Pomponius Mela (1世紀) ローマの地理学者。カスピ海、地中海、紅海、ペルシヤ湾沿岸の諸国についてのべた『地理学』3巻がある。1582年、アントワープで、注釈つきのが出版されているが、ディオニュシオスやソリヌスのものと合わせて出版されたものもある。
- 49) Aulus Cornelius Celsus (1世紀) ローマの著作家、百科全書の著者。医学に関する部分(6巻—13巻)のみ残っている。内容、文体共にルネサンス期には高く評価され、ミルトンは甥たちの教育に用いている。
- 50) Gaius Plinius Secundus (23頃—79) ウェスパシアヌス帝時代の総督。地理、生理、植物、動物、鉱物にわたる『博物誌』37巻がある。ミルトンの甥、フィリップスは、その「大部分を」習ったと言う。
- 51) Gaius Julius Solinus (3世紀) ローマの著作家。彼の『地理学概論』は、大部分プリニウスやメラによったものであるが、英国にも触れている。
- 52) ミルトンは、甥に天文学を教えるのに『ゲミヌスの天文学』を用いている。ロドス島のゲミヌス(前1世紀)の手によるのかは疑問であるが、これのギリシア語とラテン語の対訳が、1603年にライデンで出ている。

ミルトンの天文学は、天動説に基づいていて、この『教育論』でもコペルニクスの説には触れていない。もっとも、『教育論』と同年に書かれた『アレオパヂティカ』では、「異端審問所にとらわれている老いたガリレオ」と言及している。

- 53) 古代および中世の生理学では、四体液(血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁)と体質(温、

りな方法だけで、時によっては一軍を救うこともできる。この訓練が欠けているばかりに、自分のき下の若者たちの丈夫で強健な体を台無しにはならない。そんなことでは実に嘆かわしく、指揮者の恥にほかならない。自然科学と数学のこれらの全課程を進めるにあたって、必要に応じて、うまく渡りさえつければ、専門家の助けを借りるのに何の差しさわりであろう。すなわち、狩猟家、野鳥獵者、漁師、牧羊家、庭師、薬剤師などや、科学の別の分野では、建築家、技師、船員、解剖学者である。⁵⁴⁾これらの人たちは、あるものには謝礼を払えば、又、あるものはこういう学院を支持して、きっとよるこんで来てくれるであろう。これによって、彼らの自然に関する知識が生き生きとした色合いを帯びるため、決して忘れることなく、日ましによろこびをもって増進するのである。これで、現在もっとも難しいとみなされている詩人⁵⁵⁾たち、オルフェウス⁵⁶⁾、ヘシオドス⁵⁷⁾、テオクリトス⁵⁸⁾、アラトス⁵⁹⁾、ニカンドロス⁶⁰⁾、

冷、乾、湿)との組み合わせで、人間の体質や気質が定まるとされていたが、この考え方は、ルネサンス期にも受けつがれ、ミルトンも、これらの体質、体液、季節、気質とエムペドクレスの四大説(火、地、空気、水)とを結びつける伝統的な考えに従っている。すなわち、火は、温・血液・春・胆汁質に、地は、湿・黄胆汁・夏・多血質に、空気は、乾・黒胆汁・秋・憂うつ質に、水は、冷・粘液・冬・粘液質にそれぞれ対応する。

- 54) 前半のグループは、動植物などの「より低い」被造物をあつかう人たちで(薬剤師とは主として薬草をあつかう人のこと)、後半のグループは、科学技術に関係する人たちである。
- 55) このように異教の詩人たちを積極的に評価している点で、ミルトンのカリキュラムは、コメニウス派のそれと対照的である。
- 56) この段階では、オルフェウス教の詩『リティカ』を差すのであろう。『賛歌』や『アルゴナウティカ』は、後に叙事詩やアテナイの悲劇を学ぶ時にふくまれるものと思われる。いずれの作品も、ギリシア語でもラテン語でも入手できた。
- 57) Hesiodos (前700年頃か) ホメロスと並ぶギリシアの詩人。甥のフィリップスは、ミルトンからヘシオドスのものを学んだというのが『労働と日々』と『テオゴニア』のどちらを差すかは不明である。おそらく前者か。ギリシア語とラテン語の対訳が出ていた。
- 58) Theokrites (前3世紀半頃) ギリシアの代表的な牧歌詩人。彼の田園詩は、ルネサンス期の田園詩の源泉となっている。1596年のハイデルベルク版がある。

⁶¹⁾ オピアノス、⁶²⁾ ディオニュシオス、又、ラテン語のものでは、⁶³⁾ ルクレティウス、⁶⁴⁾ マニリウス、それに⁶⁵⁾ ウェルギリウスの田園詩の部分なども容易にしかも楽しく読めるようになる。

⁶⁶⁾ この頃になると、幾年かの良く広い分野の教程によって、倫理学で「選択」⁶⁷⁾と呼ばれる理性の働きが、より明確に備わってくるため、道徳的な善悪についてもかなりの分別をもって思慮できるようになる。そこで、彼らを正

-
- 59) Aratos (前315頃—240頃) ギリシアの詩人、学者。天文学と気象学に関する詩『ファイノメナ』がある。ミルトンは、これを甥たちに教えている。ミルトンの蔵書にはこれのパリ版 (1559) がある。
- 60) Nicandros (前2世紀) ギリシアの詩人で医者。有毒な動物に関する著書『テリアカ』とこれらの毒の治療法をのべた『アレクシパルマカ』とがある。ルネサンス期には単独で出版されることは少なく、1530年のコロニュー版がある。
- 61) Oppianos (2世紀) キリキア生まれのギリシアの詩人。『漁業詩』と『狩猟詩』とがあるが、前者はシリアのオピアノス (3世紀) のものとも考えられている。ミルトンは、この二つを教えている。原語とラテン訳とを合わせたパリ版 (1555) がある。
- 62) Dionysios ho Alexandria (3世紀前半) アレクサンドリアの司教。哲学の領域では『自然論』がある。ミルトンが教えた著書の一つ。原語のものでは、ジュネーブ版 (1577) とパリ版 (1547) とがある。
- 63) Titus Lucretius Carus (前94頃—前55頃) ローマの詩人で唯物論哲学者。6巻の哲学詩『事物の自然について』がある。その唯物論的な見地は、たとえば、コメニウスなどには受け入れ難いものであったと思われるが、フィリップスによれば、ミルトンは、これを「ラテン詩人の最良のもの」として教えたと言う。テキストには1583年のフランクフルト版を用いたと思われる。
- 64) Marcus Manilius ローマの詩人。皇帝アウグストス (前63—後14) の時代の作家で『天文学』5巻がある。1579年のパリ版がある。
- 65) Publius Vergilius Maro (前70—前19) ローマの著名な詩人。ここでは特に『牧歌』(10篇) と『農耕詩』(10巻) とを差すのであろう。1572年のパリ版には詳しい注釈がついている。
- 66) ラテン語とギリシア語をマスターするまでの期間を3, 4年とすれば、ミルトンの生徒は15, 6才になっている。
- 67) ギリシア語 “proairesis” からミルトンが用いた語である。アリストテレスの『ニコマコス倫理学』に用いられていて、理性に基づく自発的な行為を意味する。(『ニコマコス倫理学』第3巻第2章参照)

しく堅く立たせるためには、特に絶え間ない健全な教化の手をゆるめず、美德を知り悪徳を憎むことをよりはっきりと教えることが求められてくる。同時に、若くて影響されやすい彼らの性情を導いて、プラトン⁶⁸⁾、クセノフォ⁶⁹⁾ン、ケケロ⁷⁰⁾、プルタルコス⁷¹⁾、ラエルティウス⁷²⁾、ロクリの抄録などの道徳的な作品を通して、しかもなお、一日の課業の終りに夜に入っでの学習では、再び、ダビデやソロモンや、福音書と使徒たちの書いたものなど、最終的なより所を与える明言へともどるようにすることである。個人の義務についての知識を完全に身につけた後に、今度は、一家の経済⁷³⁾について学び始めるのがよい。この頃かあるいはそれまでに、余暇を見つけてイタリア語を学んでしまうのは容易であろう。そのすぐ後で、慎重にゆき過ぎないように対処するのなら、ギリシア、ラテン、あるいはイタリアのすぐれた喜劇⁷⁴⁾を味あわせるの

-
- 68) 「道徳的な作品」とは、『ソクラテスの弁明』、『クリトン』、『メネクセネス』、『饗宴』、『ファイドン』、『ファイドロス』、『フィレボス』などを差すのであろう。
- 69) Xenophon (前430頃—354頃) ギリシアの歴史家。ソクラテスの門人。ここでは、『弁明』、『覚書』、『饗宴』などからの抜粋を差すか。フィリップスたちに教えた著作には、『アナバシス』と『キュロスの教育』がある。これら全部をまとめて一巻としたラテン語の対訳版が、1545年にバーゼルで出ている。
- 70) Marcus Tullius Cicero (前106—前43) ローマの雄弁家、政治家、哲学者。その『義務論』は、ルネサンス期の学校で広く用いられた。エラスムスの編注によるパリ版(1562)がある。ここでは『最高善と極悪について』や『友情論』をもふくめて考えていると思われる。
- 71) 先にラテン語の『モラリア』があげられているが、ここでは、その原語の『エティカ』全体を差すと思われる。
- 72) Diogenes Laertius (3世紀) ギリシアの哲學家。その『すぐれた哲學者たちの生涯と意見』は、ラテン語の対訳で1594年にジュネーブから出ている。
- 73) プラトンの『ティマイオス』に登場する人物で、イタリアの都市ロクリのティマイオスの作とされている『世界と自然界の魂について』を差す。1555年のパリ版がある。
- 74) 『旧約聖書』の詩篇、雅歌、箴言、伝道の書、及び『新約聖書』中の四福音書、使徒行伝、使徒の手紙を差すのであろう。
- 75) ここでは一家の家計のみならず、子供の教育、婚姻、その他広い意味での家庭のあり方全体を指す。
- 76) 古典喜劇には家庭や親族関係をあつかっているものが多い。

はよいことであろう。又、家庭の問題をあつかっている悲劇、「トラキスの女」⁷⁷⁾、「アルケステリス」およびそのたぐいのようなものもよい。次の段階では、政治⁷⁸⁾について学ばなければならない。市民社会の成立、目標、およびその原理を知ること、これによって、共和国が危機的な状態に襲われた時でも、近頃のわが偉い議員方のように、良心の定まらないままにあわれにも折れ曲がったあぶなっかしい葦（あし）のような有様を呈することなく、国のしっかりした支柱となるためである。その後、法と法の公正の根拠について深く学ばねばならない。始めて、しかも最高の権威をもってモーセに与えられたものから、人間の智恵にたよりうるかぎりでは、リュクルゴス、ソロン⁸¹⁾、ザレウコス⁸²⁾、カロンダス⁸³⁾などのギリシアの立法者たちの名高い伝承、さらにそこから、すべてのローマの告示⁸⁴⁾と12表法⁸⁵⁾、合わせてユスティニアヌ

77) ソフォクレスの『トラキスの女』とエウリピデスの『アルケステリス』は、どちらも献身的な貞女を主題としている。ミルトンは『教会政治の根拠』の中で、この2人の悲劇作家を自分の模範としてあげている。ミルトン所蔵のエウリピデスは、1602年のジュネーブ版で、ギリシア語にラテン訳がついている。

78) ギリシア語“politikos”の意味で、市民社会一般を差す。

79) モーセは、神にまみえて律法を授与されたゆえに、最高の預言者であると見る。(出エジプト記・19章16—25参照)

80) Lykurgos スパルタの国制や市民の生活規定の基を定めたと言われる伝説的人物で生没不明である(前1100—前600)ヘロドトス、アリストテレス、クセノフォンたちにより著名な立法者として伝えられている。

81) Solon (前640頃—560頃) アテナイの立法者でアテナイ最古の詩人。貴族政から民主政への変革期の調停者として知られる。彼の伝承は、アリストテレスやプルタルコスによるところが大きい。ミルトンは、その『偶像破壊者』で、アテナイの暴君を法に服せしめたとして彼を賞賛している。

82) Zaleukos (前660頃) イタリアの古代都市ロクリの立法者。前7世紀頃つくられたその法典は、ヨーロッパで最初の成文法と考えられている。

83) Charondas (前500頃) シシリアの立法者。前500年頃つくられたその成文法は、シシリアやイタリアでのギリシアの植民都市に用いられた。アリストテレスやシクルスによる伝承がある。

84) ローマの政務官や法務官(プラエトル)たちが布告した告示を、130年頃、法学者ユリアヌスが、ハドリアヌス帝の命によりこれらの告示を整理編集させて、これを

ス法典⁸⁶⁾にいたり、そこから、サクソン時代以来の英国の判例法、そして成文法⁸⁷⁾にいたるまでがある。日曜日とともに平日の夕刻も、今や神学の最高の問題と古代から近代にいたる教会史にすぐすのが賢明であろう。その時までには、時間を定めてヘブル語⁸⁸⁾を修得して、もう聖書が原典で読めるようにする。これに、カルデア語⁸⁹⁾とシリア語⁹⁰⁾のような方言を加えるのも不可能ではあるまい。これらの仕事がすべてしっかりと克服できた時に、始めて、すぐれた歴史書⁹¹⁾、叙事詩⁹²⁾、そしてもっとも気高く堂々とした主題をあつかうアテ

『永久告示録』とし、元老院の議決によりその効力を確認した。

- 85) ローマで、前450年頃制定され、市場に掲示されたと伝えられるローマ最古の法典。キケロなどが断片的に引用しているが、ガリア人のローマ侵略によりその掲示板は失われた。
- 86) ユスティニアヌス帝(527—565)は、法学説や勅法を整理統一するため、トリボニアヌス以下多数の法典編集委員を任命して大立法事業を遂行した。これは、『学説彙纂』『法学提要』『勅法彙纂』『新勅法』の四法典から成り、後に「教会法大全」に対して「ローマ法大全」と呼ばれた。ミルトンが、これらの法典に親しんでいたのは明らかで、当時のものとしては、1594—5年のジュネーブ版と、1620年のジュネーブ版(2巻)とがある。
- 87) 「日曜の日課は、大部分が、ギリシア語の聖書の1章を読み、それについて彼[ミルトンのこと]の博学な講釈を聞くことであった」と甥のフィリップスは伝えている。
- 88) ヘブル語の初歩は、当時の文法学校でも教えている所もあったが、大学で教えられる場合が多かった。ミルトンは、家庭教師トマス・ヤングに宛てた手紙で(1625〔7〕)、ヘブル語の聖書を贈ってもらった礼をのべている所から、この頃には、ヘブル語で『旧約聖書』が読めるようになっていたと思われる。
- 89) アラム語のこと。アラム語は、セム語族に属し、ヘブル語にもっとも近い。元来遊牧民の言語であったのが、後にカルデア人のたてた新バビロニア帝国の外交語となった。『旧約聖書』のエズラ書、ダニエル書的一部分などはアラム語で書かれている。
- 90) 元来はメソポタミア地方の方言であったが、この地方は『旧約聖書』と密接な関係があり、ヘブル語旧約聖書とギリシア語新約聖書の初期のシリア訳がある。
- 91) ギリシアでは、ヘロドトスとツキジデスのものを、ローマではサルスト(Sallust)とおそらくリウィー(Livy)のものを差すのであろう。ヘロドトスのものは、1570のジュネーブ版が、ツキジデスののは、1588年のパリ版がある。サルストの『歴史』は、断片的にしか残っていないが、1584年のベニス版がある。
- 92) ホメロスとウェルギリウスの作品を差す。

ナイの悲劇⁹³⁾が、あらゆる有名な政治演説を有してあらわれるのである。これらの演説を、読むだけではなく、そのうちのいくつかを暗記して、教えられたとおりに正しい高低と美しい調子でおごそかに朗唱するならば、デモステネスやキケロ、エウリピデスやソフォクレスの力強い精神が彼らに賦与されるであろう。そこで最後に、これらと共に、莊重、中庸、繊細のそれぞれにふさわしい様式⁹⁴⁾で、明せきに高雅に語ったり書いたりする能力を与える機能的な技法⁹⁵⁾を読むべき時となる。それゆえ、役に立つほどの論理学⁹⁶⁾は、ここでその正当な所を与えられるべきで、巧みに配列された論理学の題目⁹⁷⁾や題材⁹⁸⁾が、時いたってその閉じていた掌を開いて、プラトン⁹⁹⁾、アリストテレス¹⁰⁰⁾、キケロ¹⁰¹⁾、ヘルモゲネス¹⁰²⁾、ロンギヌス¹⁰³⁾の規範に教えられて優美に

93) ミルトンは、その詩劇『闘士サムソン』の序文で「古代につくられた意味での悲劇は、他のいかなる詩にもまさってもっとも莊重で道義的で有益である」とのべ、アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスを「いまだいかなるものもおよばない3人の悲劇詩人」と呼んでいる。

94) 古代の雄弁術で、語り手と主題と聞き手に応じて、それぞれにふさわしい3通りのスタイルを用いるべきことは、たとえばキケロやディオニュシオス（ハルカリナッソスの）ものべている。

95) 原語“Organic arts”。アリストテレスの『論理学』は、いずれの学にも属しない予備学科として、主として理論的諸学の研究の方法に関するものである。研究の「道具」という意味で後世この方面の諸論文は、総括して「オルガノン」と呼ばれている。ミルトスも『テトラコルドン』で「論理学がわれわれに提供するあの機能的 (Organic) な力……」とのべている。

96) ミルトンは、ケンブリッジ在学当時の『雄弁試論』第7で、従来の修辞学や論理学に対する批判をのべている。又、後年自らあらわした『論理学』（1672）は、ラムス (Peter Ramus) の論理学に基づいている。

97) 注16) 参照。

98) ミルトンは、真の雄弁家は、真の詩人と同様に、学識だけでなく有徳の人でなければならないとの信念を抱いていて、プラトンの『ゴルギアス』や『ファイドロス』からも「真の雄弁とは、真理を真剣に心から愛することに外ならない」（『スメックティムニューアヌスの弁護』）ことを学んだ。

99) アリストテレスの『修辞学』からは、主として雄弁のスタイルを学んだと思われる。

100) Demetrius Phalereus (前350頃—?) ミルトンが、このアテネの雄弁家のものと考えている『雄弁論』、実は別のディメトリアス（1世紀）のものであるが、これ

飾られた修辞法となるのである。修辞法の次には詩が続くことになるが、実際は、むしろこれが先立つべきであろう。詩は、精細¹⁰⁴⁾纖細の点では劣るが、より直接的、感覚的、情熱的¹⁰⁵⁾だからである。ここで言うのは、韻文をつくるための作詩法のことではない。それは以前に、文法的事項の中に出てきて学んでいるはずである。そうでなく、アリストテレスの『詩学』¹⁰⁶⁾に、ホラティウス¹⁰⁷⁾に、そしてカステルヴェトロ¹⁰⁸⁾、タッソー¹⁰⁹⁾、マッツォーニ¹¹⁰⁾、その他のイタ

には通常の三通りのスタイルの外に第4のものとして「説得的な」スタイルがあげられている。

101) キケロの『雄弁家論』などを差す。

102) Hermogenes (150頃—?) キリキアのタルススに生まれたギリシアの修辞学者。その『形体について』は、古代の著作から形体を論じたもので、ミルトンはこれに親しんでいたと思われる。

103) Longinos『秀高(なる文体)について』は、ギリシアの文学者カシオス・ロンギノス(213頃—273)の作とされていたが、現在では、1世紀半ばに書かれたものとされ、著者は不明。本書は、1554年にボンで出版されるまで知られなかった。秀高を構成する要素として、壮大な発想、激烈な感情、詞藻(しそう)、けだかい表現、ふさわしい構成の5つをあげ、又、壮大な発想の例の中に『旧約聖書』創世記の天地創造のところが加えられている。

104) 雄弁術でキケロやクインティリアヌスの言う第3のスタイルを差す。

105) ミルトンが与えた詩の定義として有名である。「直接的」とは、単純でわかりやすいことを、「感覚的」とは、視覚や聴覚にうったえることを、「情熱的」とは、ここでは広い意味で、心が種々の対象によって影響され感動されることを意味する。

106) 『詩学』であつかわれているのは、主として、悲劇と叙事詩の規則についてであるが、ミルトンは、『教会政治の根拠』第2部の序文で、「かの叙事詩の形式について、ホメロスの2つの詩とウェルギリウスとタッソーの他の2つの詩が長編の模範であり、『ヨブ記』が短編の模範となるべきか。あるいは、アリストテレスの規範がここでも固く守られるべきか。それとも天性のおもむくままにすべきか。巧みを心得て判断をあやまたない者には、これは逸脱とはならず、かえって巧みを生かすのである。」とのべている。

107) Quintus Horatius Flaccus (前65—前8) ローマの叙情詩人。その最後の作品と思われる『詩論』は、『ピソ兄弟への書簡』とも呼ばれ、作詩の要諦(てい)ののべたもので、後代の文学論に大きな影響をおよぼしたが、劇についても論じている。

108) Ludovico Castelvetro (1505—1571) イタリアの文学者。彼は、そのアリストテレスの『詩論』のイタリア語訳で、いわゆる「三一致」の規則を確立させた。ミル

リアの評釈書に述べてあるあの崇高な技法のことであって、真の叙事詩の規則とは何であるか、詩劇のは、叙情詩のは、正当性とは何か、守るべき主要な特質はどれかを教えるものである。これによって、わが国のありきたりの韻文作りや劇作家が、いかに軽蔑すべき連中であるかを彼らがじきに悟るであろうし、詩が、神と人間の問題をあつかって、どんなに宗教的に、どんなに輝かしく壮麗に用いられるかを彼らに示すのである。¹¹¹⁾この時になって、こうして物事を広い視野から見抜く洞察力が備わった時になってから始めて、あらゆるすぐれた事を書いたり作詩したりできるように彼らを訓練するのに良い時期となる。¹¹²⁾たとえ議会であろうと委員会であろうと、彼らが語れば、その唇には尊敬と注目とが集まろう。そうなれば、説教壇の様子も変わり、現在、わたしたちが説教で語られるどんな試練よりもきびしく忍耐力を試されながらその足下に坐っているのとは違う容ぼう、違う身振り、違った練ら

トンの『闘士サムソン』は、この規則に従っている。

- 109) Torquato Tasso (1544—1595) イタリアの詩人。その史詩『解放されたエルサレム』は、ホメロスやウェルギリウスの作品ともくらべられている。彼は『詩論論考』や『英雄詩論』で、叙事詩には、古代の規則の外に近代のロマンスの特質をも加えるべきことを主張している。
- 110) Giacomo Mazzoni (1548—1598) イタリアの哲学者。『ダンテの神曲弁護論』がある。
- 111) 「これらの才能〔詩人としての才能・訳者〕は、いずこに見出される場合も、まれにしか授けられない神より靈感された賜物であり、大方のものは歪め用いているとは言え、いかなる民族にも少数ながら与えられるものであって、偉大な国民の中に宿るよき市民性と美德の種を芽生えさせてこれをはぐくみ、心のみだれを静め感情を正しくととのえ、栄光ある気高い讃美の歌をもって神の全能のみ座と御威光をあがめるのに説教の役割の外に力あるものである。」(『教会政治の根拠』第2部序文)
- 112) ミルトンは、『教会政治の根拠』第2部の序文で、真に価値ある詩を書くための心がまえについて次のようにのべている。「あらゆる言葉と知識を豊かならしめることができ、天使セラフをつかわし、祭壇の聖火もて心にかなう者の唇に触れ、これをきよめるかの永遠の御霊に敬虔な祈りを捧げることから生まれるものだからである。これに加うるに、正しく選んで勤勉に読書し、しっかりと観察し、うるわしく気高いすべての芸術や出来事を見きわめねばならない。」さらに「これがある程度達成されるまでは」自分自身をそのための準備に捧げたいと結んでいる。

れ方の表現があらわれてこよう。以上が、わが国の家柄の良い紳士的な若者¹¹³⁾たちが、生きている自分よりも死んでいる先祖に頼ることをしたくなくれば、12才から21才までの時をさいて、勉強練ましなければならない学究の内容である。こういう順序正しい課程では、学習の歩調を着実にとりながら一步一步と前進することが要求され、適当な時には、すでに教わった事を復習するために後列まで下がり、丁度ローマ軍団の最後尾の隊列のように、知識全体が固く結びついて欠けるところがないように確認しておかなければならない。さて、ここで、どのような訓練とレクリエーションが、このような勉強にもっとも合致するふさわしいものかを見ることにしたい。

体 育

これまで手短かに述べてきた学究活動の課程は、わたしの読んだところから¹¹⁴⁾ピュタゴラス、¹¹⁵⁾プラトン、¹¹⁶⁾イソクラテス、¹¹⁷⁾アリストテレス、そ

113) ミルトンがこの『教育論』で目標としていることを要約すると、「家柄の良い紳士的な」(noble and gentle) 若者を、紳士たるにふさわしい自由な (liberal) 教育によって、その生まれにふさわしい (generous) 雅量に富む (magnanimous) 人物として「国の支柱」となし、議会や委員会で語ると「その唇には尊敬と注目が集まり」、時には「一軍をも救う」ことのできる「百戦練磨の指揮官となって祖国に奉仕する」ような人材を育成することである。(注 22) 参照

114) Pythagoras (前6世紀) ギリシアの哲学者、数学者。貴族主義的傾向のため故郷にいれられず、南イタリアのクロトンへ行き、そこで一種の宗教団体をつくった。ピュタゴラス教団は、密儀宗教の形をとり、魂をきよめ永遠の真理を教える手段として数学や音楽を重視した。

115) ソクラテスは、各個人の精神改造を主とし、学派をつくらうとはしなかったが、ソクラテスの理想の実現には同志の団結が必要となり、プラトンは、アテナイの北西郊のアポロン・アカデモスの神域に自らの学校を創設した。これが、プラトンの「アカデメイア」である。彼はここで、その後半生を学生とともに生活し、約40年間にわたって多くの学者や立法家を養成した。

116) Isokrates (前436—338) アテナイの著名な修辞家、政治評論家。はじめキオス島に、後にアテナイに学塾を設け、約40年にわたって教え、名声天下を風びし多数の門弟が集まった。ミルトンの学院は「リベラルな」知識を雄弁術によって活用し、市民社会に有益な人材を育てようとする点で、イソクラテスのそれに近いと見るこ

の他古代の名だたる学派に非常に近いもので、これらから、キレネとアレク¹¹⁸⁾サンドリアのさかんな学究活動のほかに、数多くの名高い哲学者、修辞家、¹¹⁹⁾歴史家、詩人、君侯たちが輩出したのである。しかしながら、この課程は、次の点でこれらにまさっていて、プラトンがスパルタ共和国について指摘したほどの大きな欠点をも補うのである。すなわち、かの市が、若者を主として戦（いくさ）のために訓練し、又、アカデメイアやリュケイオンでは、全員が法服のためであったのに対して、わたしがここで描く教育機関は、平時にも戦時にも等しく有効なのである。¹²⁰⁾それゆえ、昼食前の1時間半ほどは、¹²¹⁾体育とその後の適当な休息にあてるべきである。もっとも、このための時間は起床時刻の早さに応じて適宜延長してもよい。わたしが第一にすすめる体育は、剣の正確な使い方で、防御し、刃や剣先によってうまく攻撃することである。これによって、健康で身軽で強壮で息切れがしなくなり、彼らを大柄で長身にするとともに、勇敢で恐れを知らぬ勇気を鼓舞するのにもっとも

ともできる。『教育論』と同年に書かれた『アレオパヂティカ』は、イソクラテスがアテナイの議会へ書き送った演説の題名にちなんでつけられたものである。

- 117) アリストテレスは、若い頃20年間、プラトンのアカデメイアに学んだが、後に、前335年ころ、自分の学校をアテナイの東郊アポロン・リュケイオスを祭った聖域に開設し、そこよりこの学校は「リュケイオン」と呼ばれ、その学派は「ペリパトス派」と称された。
- 118) 前400年から前275年まで、北アフリカのキレネで、ソクラテスの門人アリステイッポスによっておこされた学派。数学の中心となった。
- 119) アレクサンドロス大王が、前332年ころ、エジプトのナイルの三角州にアレクサンドリア市の一つを建設したが、プトレマイオス朝の奨励によって文化の中心地として栄え、ムーサイ学園が設立され、蔵書数10万冊といわれる図書館をはじめ、あらゆる研究機関が完備されていた。デメトリオスなどペリパトス学派と関係の深い者が多かったのでアリストテレスの学風が強く、多くの著名な学者を生んだ。
- 120) 古代のトーガ（外衣）は、平和の象徴として平時に着用されたが、ここでは、ミルトンの頃の法官服と聖職服をもふくめているのであろう。
- 121) この『教育論』が書かれていた頃は、すでに内乱が勃発していて、イングランド北部の形勢を定めるマーストンムアの闘い（7月2日）がせまっていたのであるが、ここでは、こういうさし迫った情勢のためではなく、より一般的な「軍事教練」を差す。

適した方法でもある。時に応じ、真の堅忍不拔を教授し教化することでこれと調和させるならば、性来の英雄的な勇気となって、不正を行なわせる臆病を憎むようになる。又、英国人の得手とされていたレスリング¹²²⁾のいろいろな固めや締めわざにも熟達していなければならない。戦いで引いたり取り組んだりして組み伏せるのにたびたび必要なのだから。恐らく、これで十分に一人一人の強さを試し励ますことができよう。規則正しい合間を置いて一息ついている間や、食事前の休憩時間を見計らって、荘重で神々しい音楽の調和音を聞いたり学んだりして、興奮で疲れた心をほぐし静めるのが有益でもあり楽しくもある。その時は、巧みなオルガン演奏者が、崇高なフーガで、おごそかな旋律¹²³⁾からより複雑な¹²⁴⁾のまでを随奏しているか、全体の合奏で、巧みな即興的効果をつけてすぐれた作典家が苦心の和音にうるわしい変化をつける。時には、リュートや静かなオルガン・ストップが、宗教や戦士や市民生活を歌う高雅な歌曲に伴奏をつける¹²⁵⁾。賢者や預言者たちに誤りがなければ、これは、気質や振舞いに強く働きかけて、野卑な粗雑さと乱れた情念を静めておだやかにするのである。同様のことは、食事の後でも、消化の第一段階¹²⁶⁾で身体的作用を助け容易ならしめ、調子を整え満足して再び勉強に心に向ける目的にかなう。夕食の2時間ほど前まで勉強に心を集中したところで、突然

122) ミルトンの言うように、レスリングは英国人の得手であるから、これを教育にとり入れようとの提案が、すでに幾人かの教育者によってなされていたようである。

123) オーブリー (John Aubrey) のミルトンに関する伝記によれば、ミルトンは早くから甥たちに歌うことを教えたという。音楽を教材に入れようという案はマルカスター (Mulcaster) などの例外を除いてほとんどなされていない。

124) ミルトンの頃の「フーガ」は、カノンの形式をとる規則的な対位法によるものであったが、ここでは、ミルトンは、あきらかにより自由な形式の旋律を意味している。(『失楽園』11巻560—563参照)

125) 「おごそかな」とは、より単純な対位法の旋律を差す。

126) あるいは「合唱」をもふくむ。

127) 戦闘のためではなく、「乱れた情念を静める」ための音楽の教育的効果は、プラトンやクインティリヌスの考えによるものであろう。(プラトン『国家』3巻・399Bと401・D—E参照)

128) 摂取された食物が変質して体内に吸収されるまでの段階をいう。

の合図か号令で軍事教練に召集する。¹²⁹⁾ローマ人のしたように、季節によって戸外か屋内にする。最初は徒歩で、年令に応じて乗馬で騎兵のあらゆるわざを訓練する。これは、演習ではあっても厳格に行ない、連日呼集をかけて、布陣、行軍、野営、防衛工事、包囲と破城砲撃等のあらゆる技術、合わせて古代から近代にいたるあらゆる戦略、戦術、兵法の¹³⁰⁾教えを受けて兵役の大要を務めあげるならば、言わば、長期戦を経た名だたる百戦錬磨の指揮官となって祖国に奉仕できるのである。そうなれば、彼らは、立派な精兵をゆだねられているながら、しかるべき賢明な訓練に欠けるために、それほど度々補充することができないのに、病気でぬける羽のようにまわりから抜け去るようなことはさせないだろうし、¹³¹⁾又、無能で新兵も募ることができないままに、1中隊20名の大佐にあまんじて、見せかけだけの名簿やあわれにも残った者の賃金を飲んでしまったり、ひそかな退蔵場所に横流ししたりしている中に、残りのわずか二十幾名かの飲んだくれのなすがままにされたり、略奪や暴行にくみしたりはしないだろう。確かに、彼らが、良い人物良い指導者に備わる知識をいくらかでも心得ていたならば、このような事は決してさせないのである。さて、わたしたちの学院にもどって、学校内での不断の訓練のほかに今一つ、外へ出かけて楽しみの中から体験を得る機会がある。大気のおだやかで心持よい春の季節などには、外へ出かけて自然の豊かさを見、天地と共によろこびにあずからないのは、自然をないがしろするつむじ曲がりであろう。それゆえ、2、3年して彼らの基礎がしっかりとできた後には、わたしは、もう勉強ばかりをすすめることをせず、賢明でしっかりした付き添いをつけて、国内のいろいろな地方へ遠出することをすすめる。そして、いろいろな要さい地、又市街地や耕作地、貿易のための停泊所や港などのための建

129) 学問的教養と並んで軍事教練をも重視しているのが、この『教育論』の独自な点である。

130) 甥のフィリップスの伝えるところでは、ミルトンは彼にフロンティヌス (Sextus Julius Frontinus) [30頃—104頃] の『戦術論』(4巻)を教えている。1585年のアントワープ版がある。

131) 当時議会派の一軍を率いていたエセックス伯とその軍隊への言及か。

物と土地の利用法を学んだり視察したりするのである。時には、わが海軍と同じほど沖へ出て、航海や海戦の実地の知識もできるだけ学ぶようにする。こうした方法は、生来独自の才能を試して、その中に特にすぐれたものがひそんでいれば、これを引き出しこれを伸ばす良い機会を与えてやることになり¹³²⁾、それは必ず国益に大きく寄与せずにはおかず、この純粋にキリスト教的な知識によって今日ばかりにめぐまれた立場に立って、古来から賞賛されてきた美德と長所とを再び育成するにいたるのである。そうなれば、パリの「ダンナ方」にわが国の有望な若者を預けて、低俗でぜいたくなひ護を受けさせ、人まね猿まね軽薄者に変えられて再び送り返してもらふ必要もなくなるとい¹³³⁾うものである。だが、もしも彼らが23か4¹³⁴⁾の年で外国を見たいと思うのなら、今さら原理を学ぶのではなく、経験を広げて明察をこととするためであって、彼らは、その頃までには、どこを旅しても、あらゆる人々の尊敬と名誉を受け、又、いたる所でその地のもっともすぐれて卓絶した人々との交際や交友にあずかるのにふさわしいほどの者となっているであろうし、そうなれば、恐らく、よその国々から、自分たちの教育のためにわが国を訪れたり、あるいは、自国でわたしたちを真似るようになるであろう。

さて、最後に、食事について言うべきことはあまりないが、ただ、同じ施設内で取るのが最善である。外ですれば、それだけ時間がむだになり、いろいろと悪い習慣がつくから。食事が、質素で健康によく適量であるべきは、

132) 「各人はそれぞれの本性に順じて、ちがった方向へそれないよう特に注意すべきである。神は、すべての人を一つの事に向け給わず、それぞれに自分の仕事を与え給うのだから。」(『備忘録』)ルネサンス期の教育論で、このように個人の適性に留意しているものは少ないようである。

133) ミルトンは、1638年春に大陸旅行に出かけたが、これは「今さら原理を学ぶのではなく、経験を広げて明察をこととするため」であり、「その地のもっともすぐれて卓絶した人々との交際や交友にあずかる」ためであった。だが、ルイ十三世下のフランスの風潮にはあまり感心しなかったようで、著名な国際法学者グロチウスに会った後、「急いで」イタリアへ向かったと伝記は伝えている。

134) すなわち修士(M・A・)を得て2,3年後。ミルトン自身はM・A・を得て6年後、29才で旅行に出ている。

論ずるまでもないと思う。ハートリブ先生、これで、御希望に従って、教育の最善最高の方法に関してあなたと何回か語り合った事についての総括的な見解を文書にした。ある人たちのように、幼少期から始めることはしなかったが、¹³⁵⁾簡潔を旨としなかったならば、この事も多大の考慮に値しうることはあった。他にもいろいろと細詳にわたることができたであろうが、これを試みようとするほどの方々であれば、これで十分に導きと指針にはなと思う。ただ、わたしの信ずるところでは、これは教師を自任する人なら誰でもひけるという弓ではなく、ホメロスがユリシーズに与えたのに匹敵するほどの筋力を要することである。¹³⁶⁾にもかかわらず、実験的にやってみるならば、遠くでそう見えるよりはずっと容易だということになるであろうし、明るい見通しもでてくると確信している。ともあれ、それはわたしが想像する以上の困難を出ないであろうし、その想像によれば、最善がかなえられるという大そう幸いな可能性が示されるにほかならない。もしも神がこのように定め給い、この時代にそれを悟るに足る精神と能力とがあるならば。

135) プラトンの『法律編』にも子供の教育に関する言及があるが、ミルトンと同時代のものでは、マルカスター (Richard Mulcaster) の『初等教育の第1期』(1587)、クリーランド (James Cleland) の『予備教育』(1607)、ハーマー (Samuel Harmer) の『民の声』(1642)、ダーリー・ハートリブ・コメニウスの『現代および後代の公益を推進する運動』(1642) などがある。ミルトンの学院生は、これらの課程を終えていることになっている。(注25参照)

136) オデュッセウスの后ペーネロペイアが、彼の留守の間に言い寄ってきた求婚者たちをためすために、オデュッセウスの弓矢を持出した話。(『オデュッセイア』第21巻参照)